

2026年スケジュール

2026年6月18、19日

全国油症治療研究班会議

福岡リーセントホテル〔福岡市〕に於いて開かれました。

全国油症一斉検診

下記の11班により年に1回実施しています。

昨年の研究成果

2026年6月18、19日に全国油症治療研究班会議が開催されました。多数の基礎的・臨床的研究の報告が行われました。その概要をご紹介します。

令和8年度全国油症治療研究班会議より
〔その1〕

毎年油症検診結果の集計を行っています。受診者の健康管理のため、また毎年の集計結果の積み重ねにより判明する症状の傾向や変化を治療研究に活かすためにを行っています。

福岡県保健環境研究所の酒谷圭一先生は、信頼性のあるPCB濃度の取得を続けるための新たな機器分析法について報告されました。

<報告内容>

現在、当所における血液中のPCBの分析には、成分を分ける能力や感度に優れた「ガスクロマトグラフ-高分解能質量分析装置」(GC-HRMS)を用いています。近年、装置を製造する業者が少なくなっており、GC-HRMSの替わりとなる機器分析法の開発が求められています。そこ

令和8年度 自治体連絡先

福岡県班

(福岡県、大分県、宮崎県)
福岡県保健医療介護部生活衛生課食品衛生係
TEL: 092-643-3280

長崎県班

(長崎県、佐賀県、熊本県)
長崎県県民生活環境部生活衛生課食品乳肉衛生班
TEL: 095-895-2362

関東以北班

(東京都、川崎市、埼玉県、さいたま市、茨城県、横浜市、神奈川県、栃木県)
さいたま市保健衛生局保健部生活衛生課
食品・医薬品安全係
TEL: 048-829-1300

千葉県班

(千葉県)
千葉県健康福祉部衛生指導課企画調整班
TEL: 043-223-2626

愛知県班

(岐阜県、静岡県、愛知県、三重県)
愛知県保健医療局生活衛生部生活衛生課
食の安全・安心グループ
TEL: 052-954-6297

大阪府班

(滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県)
大阪府健康医療部生活衛生室
食の安全推進課食品安全グループ
TEL: 06-6944-6705

島根県班

(島根県、鳥取県)
島根県健康福祉部薬事衛生課食品衛生係
TEL: 0852-22-6487

広島県班

(広島県、岡山県)
広島県健康福祉局食品生活衛生課食品衛生グループ
TEL: 082-513-3106

山口県班

(山口県)
山口県環境生活部生活衛生課食の安心・安全推進班
TEL: 083-933-2974

高知県班

(愛媛県、高知県、香川県)
高知県健康政策部健康対策課
TEL: 088-823-9684

鹿児島県班

(鹿児島県、沖縄県)
鹿児島県保健福祉部生活衛生課食品衛生係
TEL: 099-286-2786

で本研究では、「ガスクロマトグラフ-タンデム質量分析装置」(GC-MS/MS)を用いた分析法を検討しました。油症パターンの解析では、血液中の3物質(PCB118、PCB153、PCB156)の濃度を指標に用います。これらの濃度が低い場合は測定試料の濃縮率を上げるなど工夫を加えた上でGC-MS/MSを用いて分析し、従来のGC-HRMSで得られた濃度と比較しました。その結果、両者は、低濃度から高濃度に至るまで幅広い範囲で良く一致し、GC-MS/MSがGC-HRMSに代わる機器分析法として有用であることが示唆されました。

福岡県保健環境研究所の堀就英先生は令和7年度全国油症検診集計結果と油症患者さんの血液中PCDF等の測定結果について報告されました。

<報告内容>

全国油症検診の受診者は、令和2年度に新型コロナウイルス感染症のため検診体制を縮小したため約100名まで減少しました。令和5年度以降は通常の検診体制に戻り、受診者数はコロナ禍前の水準に戻り、近年は約600名の方々が受診されています。令和7年度の受診者数は587名で昨年度よりも35名増加しました。587名の内訳は集計の速報値で認定患者が399名、未認定者が188名であり、このうち血液中のPCDF等(=ダイオキシン類)を測定したのは、認定患者41名、未認定者188名の計229名でした。測定結果を解析したところ、血液中の2,3,4,7,8-PeCDF濃度は、認定患者で平均12 pg/g lipid、未認定者では平均4.9 pg/g lipidでした。油症診断基準では50 pg/g lipid以上を「高い濃度」としていますが、未認定者188名の中で「高い濃度」に区分される方は今回認められませんでした。

九州大学病院油症ダイオキシン研究診療センターの芦田美輪先生は、皮膚から出る「皮膚ガス」の採取方法について報告されました。

<報告内容>

私たちはダイオキシンが体の外にどのように出ていくのかを調べ、将来の診断や治療につなげることを目指しています。特に、人の皮膚の表面からわずかに出てくる揮発性の物質「皮膚ガス」に注目しています。これまで、皮膚に専用カプセルを密着させてガスを直接集めて分析していましたが、専用機器がない地域では検査ができないという課題がありました。そこで、特殊な柔らかい素材を使って額の皮脂を採取し、そこから発生するガス成分を分析したところ、多くの成分を効率よく検出でき、従来の方法とほぼ同様の成分を評価できることが確認されました。この方法を用いて9名の患者さんの額の皮脂を分析したところ、一部の成分は血液中のダイオキシン類の濃度が高い方で少ない傾向がみられました。ただし、今回見つかった成分が体内のダイオキシン類の蓄積や状態をどの程度反映しているかはまだ明らかではありません。今後も油症に関連する物質を見つけるため、さらに検討を進めていきます。

ダイオキシンによる健康影響について研究しています。

九州大学病院 産婦人科/九州大学 環境発達医学研究センターの濱田律雄先生は、油症患者さんのお子さんとお孫さん(油症2世・3世)の生理や妊娠・出産に関わることにについて、一般の方と比べながら油症次世代への影響について検討されました。

<報告内容>

令和7年度の検診で、油症のお子さん・お孫さん(2世・3世)の女性114名について、生理や妊娠・出産にかかわることを調べました。初めて生理がきた年齢や生理が終わる年齢は、一般の方と同じくらいでした。卵巣や子宮の病気(多嚢胞性卵巣症候群や子宮内膜症)は、一般の方より少し多めにみられました。不妊治療を受けた方の割合は、一般の方と同じくらいでした。また、油症2世の方のお子さんについて、少し早めに、または小さく生まれる割合が、一般の方より少し多めにみられました。これらが油症と関係しているかどうかは、現時点でははっきりしておらず、引き続き丁寧にみていく必要があります。

九州大学整形外科の藤原稔史先生は、ダイオキシン類が体内に長期間残ることが「骨の健康」にどのように影響するかを突き止めるため調査を行われました。

<報告内容>

ダイオキシン類が体内に長期間残り続けることで様々な症状を引き起こしますが、これが骨にどう影響するかは分かっていませんでした。そこで、患者さんのデータからダイオキシン類の濃度と骨密度(前腕)の関係を分析し、細胞実験を行いました。その結果、男性ではダイオキシン類の血中濃度が高い人ほど、骨密度が明らかに低いことが分かりました。一方で、女性にはこの明らかな差は見られませんでした。また、ダイオキシン類が骨を作る細胞と壊す細胞の両方の働きを邪魔していることが判明しました。この研究からダイオキシン類への長期的な曝露が、男性の骨密度低下のリスクを高める可能性が示されました。

昨年の研究成果の概要は、
油症ニュース51号に続きます。

油症 次世代調査

参加者募集中

令和8年度も調査を継続しております
ご協力よろしくお願いいたします

お問い合わせは
九州大学病院 油症ダイオキシン研究診療センター

電話：092-642-5211